



図書紹介



2018/04

■「カズオ・イシグロの長崎」

平井杏子 著

文学の芽を育てた歴史の町。ノーベル賞受賞のスピーチで「日本人と長崎」を意識して語る。本書は長崎出身の著者が長崎との接点に迫った素顔のカズオ・イシグロ像



■「ミサの鑑賞」 —感謝の祭儀をささげるために—

吉池好高 著

イエス・キリストとその弟子たちが示した圧倒的な愛とゆるしの姿。カトリックの信仰を表すミサを味わい理解するために



■「キリスト教とは何か⑩」

粕谷甲一 著

どん底こそ希望の起点。キリスト教二千年の歴史における反省と謝罪。退潮ムードに覆われている教会が今日直面している課題は何か。「価値あるものはただ愛だけ」とのことばの重みがわたしたちに問いかけるもの。



■「ミサ聖祭に与えるための準備」 ロマーノ・グアルディーニ著 アンドレア・ボナツィ訳注

世俗化する現代社会の中でミサとは何か、ご聖体とは何かを問いかける。古典的名著



■「教会だより」

水浦征男 著

カトリックに川教会に綴った8年間。ここに収めた「教会だより」は西宮市の仁川教会報「タウ」の巻頭に掲載されたエッセイです。2009年4月から2017年3月までの8年間分です。



■「こころの深呼吸」 気づきと癒しの言葉 366

片柳弘史著

一日ひとこと、あなたの心に新しい風
多くの共感を集めた神父の言葉を厳選！



■「修道院の風」

原造 著

若者に勇気を、せわしく不安な暮らしに愛を、疲れた心に安らぎを、競争社会の真ただ中から隠れた修道生活へ。祈りの日々、折にふれて綴った随筆集



■「祈り」

奥村一郎著

すでに13年前になるが、祈りに関する奥村師の一論文を読み、祈りを忘れた現代人が歌を忘れたカナリアのようなものであるという師のことばに強く心を打たれたことがある。

■「わらいじそう」 帯木蓬生 作 小泉るみ子 絵

いつもだれかが、あなたを見守っているよ。お父さんとお兄さんは朝早くから畑に出て、野良仕事をします。仕事は日が暮れるまでつづきます。

